

■暑い日々が続いておりますが、会員の皆様にはご活躍のことと拝察いたします。18巻2号をお届けいたします。例年通り、学術大会抄録集を兼ねております。今年は札幌開催ということで、例年より2カ月早い大会の開催に伴い、会誌の発行もこの時期になりました。

■今号には、気鋭の先生方に総説3件をお寄せいただきました。北村真吾先生には、ヒトの体内時計に関する個人差に着目したクロノタイプの解析について、睡眠、気分調節などとの関わりをまとめて頂きました。高橋正也先生には、特に夜勤中の睡眠という観点から、ヒトの睡眠を上質化するに何が必要か、議論、ご提言を頂きました。ともに、時間生物学の社会的・臨床的な意義を改めて捉えなおす際に、とても参考になる論考と存じます。さらに、前号に引き続き、郡宏先生にはリズム研究、特に位相解析における数理的なアプローチについて詳しく解説していただきました。前号と併せて把握していただければ、概日時計の数理モデルの論文を読んだら、自分で考えたりするときに、相当役に立つと思います。

■さらに、今号では最近研究室を立ち上げられた京都府大の八木田和弘先生と、シアトルのワシントン大学の今泉貴登先生から、ラボのセットアップや、それに至る苦勞話を交えた、役に立って面白いエッセイを寄せていただきました。特にこれから独立を目指す若手の方や、学生の方々にはとても参考になるのではないのでしょうか。ぜひお楽しみください。

■今号の表紙は、「生命」を巡って、生物、電子メディア、音響など様々なアプローチで独自の表現を模索し続けてきたメディアアートの大御所、銅金裕司さんに、最近の展開の中から、アリジゴクを用いた「シルトの岸辺～動く絵」の画像をご提供いただきました。アリジゴクは、本来ウス状の穴を創りますが、日本画に使われる岩絵の具を皿に盛ってアリジゴクを放ったうえで、銅金さんが独自の手つきでアリジゴクに信号を送ると、今までにまったく知られていない動きをし、複雑でヴィヴィッドかつデモーニッシュな軌跡を創発します。「日本画の岩絵の具を使って、横山大観にも描けないような深遠な線を生み出すアリジゴク」（ご本人のことば）を見つめる優しくも強靱な銅金さんの視点は、とても興味深く、様々な問題を抱えている現在、示唆的でもあると思います。アートの精神の重要性を力強く謳う「作者のことば」と併せてご堪能ください。

時間生物学 Vol. 18, No. 2 (2012)

平成24年 8月24日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsc/index.html>)

(事務局) 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院 生命農学研究科

応用分子生命科学専攻 海老原史樹文研究室内

Tel : 052-789-4066

(編集局) 〒162-8480 東京都新宿区若松町2-2

早稲田大学先端生命医科学研究センター

(TWIns) 1F 岩崎秀雄研究室内

Tel : 03-5369-7317 Email : hideo-iwasaki@waseda.jp

(印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部